

#### ■（５６）裁判記事の法廷イラストは誰が書く？

裁判員に選ばれた方は、判決の日の法廷で、傍聴席の最前列で被告の姿などをスケッチブックに急いで描く人を見たことがあると思う。記事に掲載されるイラストを描いているのは誰か。絵心のある記者の場合もゼロではないが、ほとんどは外部の「法廷画家」だ。

外注の法廷イラストは、１９８９年３月の最高裁判決で、記者以外の傍聴者にも「メモ」が認められるまでは考えられなかった。写真撮影も禁じられていたので、文章だけで何とか法廷の様子を描写するしかなかった。そもそも何で、法廷で写真は撮れないのか。戦後すぐはＯＫで、「帝銀事件」などの写真は残っている。だが、恥ずかしながら記者のモラルの問題もあり、昭和２０年代の終わりころから原則禁止された。８７年によく、開廷前に裁判官が座っているだけの撮影が認められたが、そこに被告が写ることはない。

判決記事を素早くどうかくのか。「有罪」「無罪」の双方を想定し、少なくとも２通りの「予定稿」を準備しておくのが通例だ。ただ、法廷でのやりとりや検察、弁護側をじっくり取材していけば、どちらになりそうかはある程度見えてくるものです（山）